

学校生活にも慣れてくる時期、教師と子ども、子ども同士の人間関係をさらに深めていきたいものです。そのために、子どもをよく見て、思いをよく聴き、教師が自分のことばで語りかけましょう。また、学級開き後の1ヶ月間の生活を振り返って必要なルールや約束を作ったり、係活動による自治的な取組（例：お楽しみ係による遊び、体育委員による大縄跳び練習など）を支援したりしていきましょう。



<小学校>

子どもの目線で、最後まで聴く。共感する

1 常に子どもの目線で話を聴きましょう

緊張がほぐれて自分らしさを発揮し始めると、不安や悩みを訴える子どもも出てきます。常に子どもの目線で話を聴くことを大切にすることで、子ども理解が進み、信頼が生まれていきます。

2 子どものメッセージに最後まで耳を傾けましょう

多くの子どもは、進んで自分のことを話に来ます。やる気の表れですから、時間の許す限り最後まで話を聴くことで、「先生は私のことを分かってくれる」という意識をもてるようにしたいものです。

3 言葉以外のメッセージにも注意を向けましょう

自分から不安や悩みを訴えることが難しい子どももいます。そのような子どもの場合は、姿勢、しぐさ、表情、声の調子など、言葉以外の様子の変化を注意深く見守ることが大切です。変化に気付いたら、日記や問いかけからその子の感情を受け止め、共感を示しましょう。

「ことばに出して伝え合う」

～ 心やさしい毎日を送る学級づくり ～

◇朝のニュースタイムで

「昨日、家に帰ってからのこと」「今朝、登校途中で見つけたこと」などを朝のニュースタイムで発表し合うのはどうでしょう。例えば・・・
「ヒメオドリコソウとホトケノザ、こんなに花びらの形が似ているよ、ほら！」

「本当だ。こんなに小さいのによく見つけたね」花のこと、友だちのこと、気付きを語り合い、互いの姿を見直し合う・・・そんな一日のスタートを大事にしたいものです。

◇先生自身のことばの引き出しを広げて

子どものことばを受けとめ、心に引っかかることばを返す・・・いろいろに言い換えて、先生自身がことばの引き出しを広げれば広げるほど、子どもたちは心を開いて語りだします。一人一人が心やさしい毎日を送る学級づくりの土台は、ここにあるような気がします。

<中学校>

「学級の自治力を高める」

～ ルール・約束が浸透する学級づくり ～

◇学級に必要なルール・約束を据えて

生徒の思いや願い、現実の姿に合わせて考え合い、必要なルール・約束を据えていきましょう。自分たちが据えたルール・約束は「みんなが、みんな、みんなと、みんなを」守るものであることを実感できるようにしたいものです。

学校生活の中で、今の言動はどうであったか、立ちかえる拠り所にし、生徒自身のことばで見返すようにしていきましょう。

◇生徒に託す姿勢を示して

自意識が芽生えてくる頃の生徒には、託されている自分を感じ取れるようにしていくことが大事です。温かいことばで託している気持ちを伝え、託されている喜びを感じさせたいものです。

一人一人が感じ取ることによって、自ずと学級自治の意識が芽生えていくように思われます。

「頼むよ」「待ってるよ」「大丈夫！」・・・

部活動と学級づくりに有効なコーチング

スポ根路線を脱却した、生徒の力を引き出すコーチングは、部活動や学級づくりに有効です。

◆指示・命令・恫喝から対話へ

プロ野球日本ハムのチーム練習には怒鳴り声は一切なく、前向きな言葉とコーチからの質問が中心です。一方的な教え込みもありません。

◆コミュニケーションスキルを身に付ける

- 1 **聴く**：コーチにとっての「きく」は、「聴くlisten」。相手の目を見て心を傾けて聴くこと。
- 2 **質問**：コーチは「5W1H」を駆使して深い質問をする。「Do you」の質問は「Yes」「No」の答えしかなく、そこで止まってしまう。
- 3 **誉めると叱る**：コーチングの世界では「誉める」ではなく「承認」。認めることです。認められると、やる気になる。腹が立ったとき人に何か言うことを「怒る」。極めて冷静に厳しい言葉で相手を正すことを「叱る」と言います。